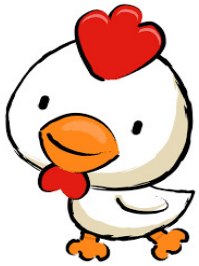

ICT 海外ボランティア会会報
No. 70

2017 年 3 月 2 日（木）

目次

◆巻頭言
ICT 海外ボランティア会を未来に繋げよう！
当会特別顧問 元駐ケニア大使　宮村　智氏

◆特別寄稿
真藤さんの人となり(1)
当会特別顧問　石井　孝氏

◆海外グラフィティ
サンパウロの運動会
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智氏

◆現地から
ミャンマーから
JTEC ﾐｬﾝﾏｰﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ担当　伊藤　清和氏

◆ICT 海外ボランティア会再開キックオフミーティング模様　事務局

◆第 28 回海外情報談話会開催のご案内　事務局

巻頭言

ICT海外ボランティア会を未来に繋げよう！

当会特別顧問 元駐ケニア大使　宮村　智

此の度、ICT 海外ボランティア会が再開されることとなった。当会の前身である NTT OB SV 会が創設された 2008 年から特別顧問を仰せつかっている私にとっても誠に嬉しいニュースである。再開のために尽力された山川新事務局長を始めとする皆様の決断と努力に敬意を表し、祝意を送りたい。そして、今後における当会の継続と更なる発展を心から期待し祈念しつつ、この拙文を奉げたい。

再開後における最初の会報なので、なぜ私が当会の特別顧問を務めているかを自己紹介を兼ねてご説明したい。私は大学卒業後直ちに大蔵省（現在の財務省）に入省し、30 年余り勤務した後、2000 年に退官した。退官後、NTT 持株会社の財務担当の取締役及び常務取締役として 4 年間、NTT に勤務する機会を与えられた。NTT 常務を辞任後、再び政府に呼び戻されて駐ケニア特命全権大使に任命され、2004 年から 3 年間、兼轄したエリトリア・セーシエル・ルワンダ・ブルンジを含めたアフリカ 5 か国の大使を務めた。大使を終えて、損保会社に勤務していたところ、2008 年春に石井前顧問・加藤前事務局長が訪ねて来られ、NTT OB SV 会を創設するので、特別顧問に就任してほしいとの要請を受けた。私は ICT の専門家ではないので躊躇を感じるところもあったが、アフリカ駐在の経験を踏まえると世の中のためになる有意義な会と思われたことに加えて、NTT でお世話になったというご縁もあるのでお引き受けしたわけである。

会の発足後、特別顧問としてやったことは、加藤事務局長の要請に応じて、時折、会報の巻頭言に拙文を寄稿し、海外情報談話会に出席するくらいであったが、会報を通じて、当会の活動や発展をフォローすることは楽しみであった。そして、①NTT の現職や NTT 関係以外の方々の入会に伴って会員数が増加して活動範囲が拡がり、会の名称も ICT 海外ボランティア会と改称されたこと、②トンガ・プロジェクトが成功裡に完了したこと、③当会の活動が高く評価されて電友会から表彰され、JICA 理事長からも感謝状が授与されたこと、④これまでの海外技術協力活動を取り纏めた冊子が発行されたこと、などを知るたびに、我がことのように喜んでいた。

ところが、昨年 11 月末に突然「ICT 海外ボランティア会クローズのご挨拶」を受け取り、大変に驚くとともに、とても残念で寂しい思いがした。しかし、私がやれることは何もなく、加藤事務局長を始めとする幹部の皆様の長年に亘る尽力に対してご苦労様を申し上げるしかなかった。そうしたところ、新年に入ってから、当会を再開することになったとの連絡を頂戴し、冒頭に述べたように心からの喜びを感じた次第である。

私は ICT 海外ボランティア会の再開には大きく分けて 3 つの意義があると思う。

第 1 は情報通信技術（ICT）の普及による途上国の経済発展への貢献である。パソコンやインターネットが一般に使われ始めた 1990 年代以降、一国の経済の発展は ICT を使いこなしているか否かによって大きく左右されるようになった。デジタル・ディバイドと言われるように、ICT の普及如何で経済成長率や貧富の格差が生じる時代となったのである。例えば、私が大使を務めた国の中で、ルワンダは知識集約型経済の実現を目指して ICT の普及に力を入れているが、その甲斐もあって過去 15 年間の平均で毎年 8%の GDP 成長率を達成している。こうした成功例を見ると、ICT 海外ボランティアが途上国の経済発展に貢献する余地は少なくないと思われる。なお、ICT 分野を含めた日本の海外ボランティア

は途上国の組織や地域社会に入り込んで活動することを基本としているので、途上国の人々から親しまれ、大いに感謝・評価されており、日本のイメージ向上や途上国と日本との友好関係の促進にも多大な貢献をしている。

第 2 は ICT 専門家に対する退職後の生きがいの提供である。現在の退職年齢は 60～65 歳かと思うが、大半の方々は退職年齢に達しても元気で、気力・体力とも充実している。SV(シニア・ボランティア)はそうした方々に退職後の一時期を生きがい感じながら過ごしてもらう有意義な選択肢を提供する。私が大使時代にお会いした SV の方々は全て、途上国の国造りや人材育成に貢献しているという生きがいを感じながら、充実した SV 生活を送られていた。

第 3 は当会の役割を未来に繋いで行くことである。人間は歴史や経験から学ぶ動物であり、人の営みは過去から現在、そして未来へと繋いでいくことによって、充実し発展していくものが多い。このことは文化、学問、研究、ビジネスなどいろいろな営みに当てはまる。当会の活動も長く繋いでいけば、海外ボランティア活動の成果が着実に積み上げられ、さらに充実し発展していく可能性も高まることになろう。現に、再開後には、これまでの活動に加え、国内外企業等との交流と企業の海外進出への支援という新たな目的も付け加えられると聞いており、ここから何が生まれてくるか楽しみである。

以上のように、ICT 海外ボランティア会を再開する意義は大きく、今後に対する私の期待も大きいものがある。他方で、当会は何ら財政的な基盤がなく、全ての活動がボランティアで実施されているので、あまり無理をしたり、急いだりすると続かなくなるかもしれないという懸念が無いわけではない。再開前の活動だけでも高い評価を得ていた当会であり、ボトムラインはとにかく当会の活動を着実に継続して、未来に繋いでいくことである。再開を機に、未来へ繋いで行くことの価値や重要性を再確認しつつ、一歩一歩、着実に活動を展開していってもらいたいと思う次第である。（了）

特別寄稿

真藤さんの人となり(1)

当会特別顧問　石井　孝

「ICT 海外ボランティア会」を一段落させホッとしていたら、山川、村上、山崎の三氏が中心に ICT 海外ボランティア会の灯を消してしまうのは勿体無い、何とか続けようという事で、「若返った ICT 海外ボランティア会」がスタートする運びとなった。

前任者の一人としてはとても嬉しい。これですっかり肩の荷も下りたと思っていた。すると、新しい会報に真藤語録を続けろという話である。これまでの語録は文字通り真藤さんご自身の言葉であるが、今度は私の第一人称で真藤さんを語ってみては如何かというご下命である。私に比べたら天と地ほどにかけ離れたスケールの大きな真藤さんを語るとは、真に畏れ多いことで散々ヘジテイトした。しかし、サラリーマン人生九回の裏ツーアウトから廻って来たチャンスに、真藤社長から頂いた鮮烈な教訓を書き留めるのも、これが最後かも知れないという想いが過ぎり、恥を忍んでトライする覚悟を決めた。

以下､真藤さんのご指導の下､我々がやって来た仕事を時系列に従って振り返りながら、十回ぐらいに分けて、思うまま、ザックバランに、教訓に絡めつつ、心を込め「真藤さんのお人柄」と「ものの考え方」を中心に綴ってみたいと思う。

1．何の因果で

真藤さんは、1981 年、電電公社総裁として着任された。当時、本社勤務であったので、講堂で着任のご挨拶を大勢でお聴きした。その時は、歴代の総裁のように雲の上の遠い存在に思えたものである。

その後、大阪の現場管理機関に転勤し、1985 年、年齢も 50 歳に達し愈々電々生活に終止符を打つかと思っていたら、4 月 1 日の民営化を契機に発足する新組織を担務してもらうので、社長直々に話をするので辞令交付の前日 3 月 31 日に社長室に出頭せよとの突然の命令が下った。

総裁とさしで話すなど、長い公社経験ではとても考えてみたことがない。大いに戸惑ったが、兎に角どんな人か調べる必要がある。あからさまな情報は外部の人に聞くのが一番と思い、物産大阪支店の然る方に当たってみた。

すると、三井グループ内の評判は、心から心酔する者、真藤さんの権力を笠に着て動く者､蛇蝎の如く忌み嫌う者に三分される､毀誉褒貶の激しい方であるということであった。「真藤さんに嫌われたら大変だが、好かれたら、これもまた苦労が多いだろう、石井さんも大変ですね」と言われた。

実際お会いしてみると､実にザックバランで長年直接の部下であったかのような態度で、タバコを切らさず諄々と話された。

話の中身は、一番大事な商売道具である電子交換機がダウンすると、電々社員では手におえないのでメーカーの技術者が直しに行くそうだが、君はこれについて如何思うか。これからの世の中で､ソフトウエアの役割を君は如何考えているかといったところであった。

兎に角、新組織の任務は電子交換機のソフトを内製し、一切のトラブルは自分達で直せるようにすることだと厳命された｡この点に関しては反論を許すムードでは全くなかった。正直のところ、成算の見込みは四割もないであろう、実に憂鬱な気分に襲われた。それにしても、真藤さんにとっては何処の馬の骨か分からない男を名指して大事な仕事を任せる筈がない、取り巻きが企んだに違いないと思うとなお更、何の因果で、などといった鬱然たる想いに陥った。どうもこの辺りが顔に出たのかも知れない、真藤さんも気取ったようである、以降、再三呼ばれては懇篤な指導を頂いた。

真藤語録に**「スタート時は強権発動」**というものがあるが、真藤さんとの邂逅まさに此れであった。

「スタート時は強権発動」

新しい方向へ全体を転換させるスタート時には、本当に理解している幹部が、やみくもに命令して、それ以外には絶対やらせないぞ、ということから始めて、結果を見せて、納得させるやり方でやらないと間に合わない。

習字を習う時でも、大人に手を握られて、いやおうなしに大人の力で動かされて、初めて手の動かし方のタイミングなり、押さえつけ、引っぱりの感じが出てくるものである。

海外グラフィティ

サンパウロの運動会

日本ベンダーネット社長　エッセイスト　田上　智

日経新聞に「日系移民史　新たな視座」という記事が載っていた。従来の公文書だけでなく、スポーツや映画などの観点から移民社会を描こうとする試みがされているという。

かつて、テレビ朝日・ニュースステーションでブラジル・サンパウロ州の日系移民を取材したことがある。

広島や沖縄からの移住者が多いブラジル日系人社会だが、そこで、沖縄県人会の運動会に参加し、２００メートルを疾走したのだ。いやそのつもりだった。陸上はかつて中学で陸上部に属し、文京区の大会に出場、国立競技場で走った経験があったが、取材時すでに４９歳、疾走のつもりが緩走で終わった。

移民とは自身関係が深い。広島出身の曾祖父がアメリカ移民、祖父がペルー移民であった。父は職業軍人で大陸を転戦。私自身は、NTT をはじめ、国際部門で投資を業としていた。その他４８か国を訪問、アフリカ、アメリカ、ギリシャ、スリランカ、タイなどに長期滞在もした。

日本人のグローバル化のステップである、（１）移民（２）戦争（３）国際ビジネスという典型的なステージを踏んでいる。

ニュースステーションでは、「ブラジルに渡った隠れキリシタン」というタイトルの元、隠れキリシタンの子孫で、ブラジル下院議員になった「平田　進（ひらた　すすむ）」に焦点を当てた。自分とは、遠い親戚筋にあたる。そこで、３週間にわたって、サンパウロ州で取材したが、大学時代には「海外移住研究会」に属し、真剣に南米行きを考えていた。

海外渡航解禁の１８６６年から１５０年あまり、日本からの海外移住者とその子孫は、約２５０万人、うちブラジルでは、１６０万人となっている。日本から持ち込まれた「運動会」という文化は、記事によると、最初陸上だけだったのが、今や、卓球や柔道などに広がりを見せている。今回のリオ・オリンピックでは、確かにお家芸的な柔道は圧倒的な力を見せたし、卓球も復活をうかがわせた。サンパウロ取材時も、大学の先輩で、ミュンヘンオリンピックで銅メダルを獲得した日系一世にお目にかかった。移民船で港町サントスに上陸、収容所などで苦労をなめたが、商売で成功をおさめていた。

サンパウロ・沖縄県人会の運動会で走ってからはや２０年、一緒にトラックを一周した日系人は今、どうしているだろうか？　　（了）２０１６．９．５

現地から

ミャンマーから

ＪＴＥＣプロジェクト　ミャンマー担当　伊藤　清和

最近、何人もの人から、ちょっと若返ったみたいと言われる。どうも、それは、４か月間にわたるミャンマーでの仕事のせいのような気がする。

よく理解できていない光通信技術について、英文で資料を書いて、会議でプレゼンせね

ばならない機会が何回かあった。プレゼンそのものは”セリフ”を暗記すれば何とかなるが質疑がうまくできない。質問がなかなか聞き取れないし、聞き取れても答えが直ぐには出てこない。毎日、解決せねばならない課題があり、緊張感を強いられた。そしてその緊張感を乗り越えたとき、社会に何らかのお役に立てたと実感できた。

アンチエイジング大賞を受賞したビートたけしが「人前に出る緊張感」が若さを保つ秘訣と言ったそうだが、まったくその通りのような気がする。残念ながら、畑仕事中心の日々の生活の中では、なかなか緊張感を強いられる機会はない。程よい緊張感を味わえる会社勤めのころが懐かしい。

（事務局注）

本稿は、伊藤さんがフェイスブックに投稿した記事を石井孝さんのご紹介で得、本人の了解を得て掲載しました。

お知らせ

ICT 海外ボランティア会再開キックオフミーティング模様

事務局

ICT 海外ボランティア会は 2016 年 12 月にクローズの意向が示されましたが、その重要性等から、灯を消すことなく継続してほしいとの声が多数寄せられました。このため、関係者の方々と今後の進め方等について相談してきたところ、2017 年 2 月 2 日(木)、(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)会議室及び Web 会議室において再開キックオフミーティングが開催され、下記のとおり再開することとなりました。今後とも皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

ICT 海外ボランティア会再開の当面の進め方

1. 会及びその名称は、現行どおり継続する。
2. 会の目的は、①会員相互の交流・促進、②国内外企業等との交流・支援、③NTT 及び NTT-OB 会等との連携・支援、等とする。
3. 会報は賛同者拡大等に効果的であり、簡素化・省力化し継続する。
4. ホームページは多数の外部アクセスがあり、現行どおり継続する。
5. 会員メーリングリストを新設し、会員間の自由な意見交換等を促進する。
6. 談話会は談話会(サロン)及びワークショップ(課題解決等)に衣替えし、自薦・他薦の発表希望者又は案件の都度、不定期で実施する。また、国内外と交流するため、東京は集合形式、その他地域及び一部希望者は Web 会議形式で参加できるようにする。
7. 新しい運営体制は、次のとおりとする。

(1)　特別顧問・顧問・幹事(敬称略)

・特別顧問：　宮村　智、石井　孝

・顧問：　加藤　隆、吉田　眞、飯塚　久夫、長江　靖行(NTT 東)
　福迫　英司(NTT 西)、牛坂　正信(JTEC)、北島　浩司(JOCV)

・幹事：　村上　勝臣、山崎　義行、須藤　正俊、倉島　渡(NTT 関係技術士の会)
　松田　成就、安達　信男、山川　博久

(2)　主要業務分担(敬称略)
・会報担当：　村上　勝臣、山川　博久
・ホームページ担当：
　　山崎　義行、安達　信男
・談話会(サロン)&ワークショップ担当：
　　加藤　隆、村上　勝臣、須藤　正俊、安達　信男、山川　博久
・地域担当：　村上　勝臣(東北・北海道)、須藤　正俊(東京・関東)、山川　博久(北陸・信越)、松田　成就(関西・東海)、山崎　義行(九州・中国・四国)
　　(注)　他に適当な候補者がいれば、地域分割する。
・運営方法：　毎月 1 回第 2 火曜日 18 時から 30 分程度、Web 会議を開催し、当会の進捗管理、今後の進め方等について意見交換することにより、当会活動を組織的に運営する(特別顧問・顧問は可能な範囲で参加)。

再開キックオフミーティングでの補足説明は次のとおりです。

・当会の目的について、従来、会員相互の交流・促進が中心であったが、当会が会員・賛同者 500 名超の専門家集団であることを活かして何らかの社会貢献ができるよう、国内外企業等との交流・支援についてもチャレンジしたい。例えば、日本政府が大企業 OB による中小企業支援を促進していること、地方創生に力を入れていること、日本再興戦略で 5 年間に新規 1 万社の海外展開を支援していることなどを考慮して活動できないかと考えている。また、海外在住の日本人(JOCV、SV 含む)との交流、逆にインバウンドとしての在日外国人中小企業等への支援なども考えられる。途上国の電気通信事業者も民営化したため、JICA 専門家、JOCV、SV などの支援が得られなくなったことなどから、当会の知識・経験を期待しているかもしれない。いずれにしろ、相手がいることなので難しい面もあるが、会員・賛同者の皆様のご指導・ご支援をお願いいたします。
・会報は 3 月に再開号を発行したいと思っている。宮村様に巻頭言、石井様に真藤語録の続編をお願いしたところ快諾をいただき、真に感謝いたします。田上様の寄稿もあり、今後とも会員・賛同者の皆様からのご寄稿をお願いいたします。
・ホームページは現在停止中であるが、機器整備後、再開する予定である。
・メーリングリストは会員間の自由な意見交換を促進できるので、今後、方法等について検討したい。
・談話会は非常に大変であり、不定期で開催したいと思っている。Web 会議を併設するので、地方及び海外在住の講師も可能である。会員・賛同者の皆様からも自薦・他薦の講師ご紹介をお願いいたします。

上記のとおり、ICT 海外ボランティア会再開の当面の進め方が承認された後、特別顧問からご挨拶をいただきました。宮村特別顧問からは、駐ケニア大使、大蔵省、NTT 等でのご経験、特にアフリカを含め ICT がますます重要になってきており、当会のさらなる発展を祈念するとのご祝辞をいただきました。石井特別顧問からは、新旧事務局への感謝・激励、真藤語録の経緯と続編、社内ソフトウェア部隊の必要性等についてご挨拶をいただきました。その後、各顧問・幹事から自己紹介があり、再開キックオフミーティングを終了しました。

お知らせ

第 28 回海外情報談話会開催のご案内

事務局

第 28 回海外情報談話会を下記のとおり開催いたしますので、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

1. 日時　　2017 年 4 月 19 日(水)15 時～17 時
(3 月 19 日ではありませんので、ご注意ください)

2. 場所　　(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web 会議(注)
東京都品川区西五反田 8-1-14 最勝(さいしょう)ビル 7 階
http://www.jtec.or.jp/about/access.html

3. 講師　　橋本　了様
(元 NTT インターナショナル社長、元スリランカ・テレコム社長)

4. 演題　　「NTT における海外活動の変遷」

5. 定員　　35 名(先着順)

6. 参加費　　無料

7. 申込方法　参加ご希望の方は、下記連絡先にご氏名をご連絡ください。

＜連絡先＞　事務局　info.ictov@network.email.ne.jp

(注)Web 会議へのご参加は東京首都圏以外からのご参加に限定いたします。ご氏名のほかメールアドレス及び参加時の県名(海外は国名)をご連絡ください。Web 会議への参加方法は次のとおりです。

①次のサイトで初回のみ、Zoom Client for Meetings(サイトの一番上にあるもの)をダウンロードし、インストールする(無料)。パソコン、スマホ、タブレットのいずれでも可能です。https://zoom.us/download
②Web 会議の案内が開始 5 分前までにメールで届くので、その会議室に入室する。
なお、Zoom はクラウドベースの Web 会議システムです。

国際協力活動だけでなく、NTT 民営化に伴う海外事業への展開へと、急転換する渦中で奮闘された橋本様のご経験談です。乞うご期待！

会報お読みの方々へのお願い

当会の拡充とともに、会報の充実も図ろうといたしております。
このため、会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず当会運営にあたっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞご遠慮なくお送りくださいますようお願い申し上げます。

＜送付先＞　事務局　info.ictov@network.email.ne.jp　又は
会報担当　村上勝臣　katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp

編集後記(編集長から一言)

引き続き編集を担当することになりました村上です。
会報マークは、今年、酉年でもありますので、引き続き酉を使用することにしました。
前事務局長の加藤さんが読者の意見を取り纏めたのを見ますと、当会報は読者の皆さんが読み馴染んでいるようなので、同様なスタイルで再開することにしました。
編集担当としましては、マンネリに流されることなく、再開後の会報らしさを徐々に出して行く考えです。今後ともよろしくお願い申し上げます。

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　村上　勝臣(編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)